

小・中・義務教育学校

校内教育支援センターにおける 実践事例集

令和7年2月

岐阜県教育委員会
学校安全課

校内教育支援センターにおける実践事例集について

〇はじめに

不登校児童生徒への支援について、文部科学省通知「不登校児童生徒への支援の在り方について（令和元年10月25日）」において、「学業のつまづきから学校へ通うことが苦痛になる等、学業の不振が不登校のきっかけの一つとなっていることから、児童生徒が学習内容を確実に身に付けることができるよう、指導方法や指導体制を工夫改善し、個に応じた指導の充実を図ること」が望まれています。

教室に入りづらい児童生徒や不登校からの学校復帰を目指す児童生徒にとって、学校内に落ち着いた空間の中で自分に合ったペースで学習や生活ができる環境があれば、学習の遅れやそれに基づく不安も解消され、早期に学習や進学に関する意欲を回復しやすい効果が期待されています。この役割を担う場所の一つが「校内教育支援センター」です。

「令和7年度概算要求の参考とするための取組状況等調査（令和6年7月、文部科学省）」及び「教育支援センターの状況等調査（令和6年9月、岐阜県教育委員会）」によると、岐阜県内にある公立小・中・義務教育学校の68.1%に校内教育支援センターが設置されています。

令和5年度には校内教育支援センターの体制を整備する市町村への支援を行う「学校内教育支援センター整備促進事業費補助金」を17の市町が活用しました。その報告書と併せて提出された「校内教育支援センター実践事例」をもとに、8校の実践を事例集としてまとめました。この8校の実践事例には分類した項目だけでなく、それ以外にもたくさんのよさがあります。この実践事例集を各学校における校内教育支援センターの運営や児童生徒を支援するための参考として活用していただけることを願っています。

〇目次

実践事例

- 【児童生徒が安心して利用できる環境の整備】・・・P2
 - ・義務教育学校
- 【児童生徒の実態に寄り添った支援】・・・P4
 - ・小学校
 - ・中学校
- 【教職員の連携の工夫】・・・P6
 - ・中学校
- 【学校と家庭との効果的な連携】・・・P7
 - ・中学校
- 【オンラインを活用した学習支援】・・・P9
 - ・小学校
 - ・小学校
- 【学習評価の工夫】・・・P11
 - ・中学校

参考資料

- ・児童生徒の状態に応じた不登校支援
- ・子どもの自己選択による居場所と支援の方向性



事例①【児童生徒が安心して利用できる環境の整備】

1 設置状況

学校種	義務教育学校	
開室時間	8:15~16:00	
校内教育支援センターの職員について	専属職員数 1人	
設置する際に工夫した点 <ul style="list-style-type: none"> ・センターには、パーティションで仕切った個人用スペースを6か所、共同作業のできるテーブルを2台設置し、児童生徒が利用場所を選択して活用できるようにした。人目を遮る目隠しも準備し、個の状況に応じられるようにしている。 ・リラックスできるように、簡単な運動(フラフープ、ストレッチ、縄跳び)に使える空きスペースを用意している。 ・利用児童生徒一人一人にホワイトボードを用意し、「教室で授業」「オンライン」「自主学習」「休憩」等の活動内容を記したカードを自分で貼り付けながら一日の計画を立てることで、児童生徒の主体性を育むとともに、一日の生活の流れの可視化を図っている。 		

2 実践事例

事例 一歩を踏み出した A さん
支援内容 5年生に進級後、一度も教室に入ることができずに不登校となった A さんは、家庭でオンライン授業を受けていた。10月に母親と見学に来室し、センター内で給食を食べるお試し利用を行った。その後も給食を食べることを中心に来室を続けた。その間に、他の利用児童生徒の状況が分かったり、担当職員への信頼関係が深まったりしたことに合わせて、祖母の登下校の送迎支援が受けられるようになったことから A さんの定期的な来室が現在も実現している。 具体的な支援内容は、以下のようである。 <ul style="list-style-type: none"> ・教室の仲間との繋がりがづくりとして、仲間が届けてくれる給食を自ら受け取る活動の見届け ・オンライン授業における学習材の確認や教室と同時進行でテストや学習プリントに取り組めるように配慮するなどの学習支援 ・担当職員との会話を通して、A さんの困り感や気持ちを聞いたり、A さん及び保護者と担任の間に入ったりするなどの情報共有における協力
児童の姿の変容 心理的に高いハードルにならず、気軽に取り組める学習内容を精選して提示してきたことで、成功体験を積み重ね、自己肯定感を高められるようになった。それにより、チャレンジをしようとする気持ち(集会を見学しに行ってみよう・学習用具を教室に取りに行ってみよう・運動をしてみよう等)が芽生えてきた。さらに、センターを利用する同学年の仲間との交流により、人とかがかわるときの緊張がゆるみ、さらに仲間と一緒に活動する楽しさを感じている様子も見られるようになった。
児童(保護者)の声 <ul style="list-style-type: none"> ・6年生になったら修学旅行や他の行事に参加したいという気持ちがあるし、楽しみにしている。現在はまだ行事などには参加できないが、「見たい、知りたい」という気持ちがある。 ・母親の迎えに来る時間より、「もっと残りたい」と思う日も出てきた。 ・母親からは、「センターの利用時間や利用回数が増えたことがうれしい。何よりも家庭ではできなかった学習や仲間との触れ合いもできてよかった。センターで楽しく過ごせているので、安心して学習状況も知らせてもらえるのでありがたいと思っている。」とされている。

3 成果と課題

成果

- ・個々の状況を踏まえ、在籍する児童生徒一人一人との対話によって信頼関係を築き、日常的に頑張りやを価値付けたり、困り感や悩みに共感したりして、児童生徒がよりよい生活の仕方を考えることに向かうための支援ができた。
- ・センターでの生活の仕方を自己決定し、ホワイトボードを使って可視化したことで、やり切ろうとする自己責任感が強くなったり、在籍する児童生徒同士の情報交換に役立てたりすることができた。それにより、自分のことだけでなく、ともに過ごす仲間にも目が向けられるようになった。

課題

- ・同じ時間にセンターを利用する児童生徒が多くなると、学習や活動をするスペースが狭くなることや、担当職員が、個々の児童生徒に対して十分な関わりができないことがある。
- ・現在、支援センターは1教室であり、1～9年生までの児童生徒が対象となっている。前期課程と後期課程の日課が異なっていることや、授業内容も幅広いため、一人の支援員では対応が難しいと感じる。

4 今後の方針

- ・利用を希望する児童生徒に関わる情報（実態、これまでの状況、本人や保護者の願いなど）を児童生徒と保護者、担任、支援センター職員、管理職などが共有する場を設定し、記録を残す。また、定期的な懇談を実施して経過を観察し、個に寄り添った支援につなぐ。
- ・担任が通室している児童生徒の支援センターでの活動に関心をもって自ら足を運んだり、必要な学習課題の準備やオンライン授業の提供などを話し合ったりするなど、主体的に関わりをもつように働きかける。

事例②【児童生徒の実態に寄り添った支援】

1 設置状況

学校種	小学校	
開室時間	8:00~15:25	
校内教育支援センターの職員について 専属職員数	2人	
設置する際に工夫した点 <ul style="list-style-type: none"> ・センターには、現在8名の児童が通っているため、一人一人の机を設置している。集中して学習や個人活動ができるように、一人一人の机の間隔を空けて設置し、グループ活動では、机を寄せて仲間と共に活動を楽しめるようにしている。大きな机やパーテーションも設置してある。 ・ロッカーに、個人の持ち物が片付けやすいように、広いスペースを使用できるようにしてある。 ・掲示板には、一人一人の折り紙作品などを掲示し、頑張りを認める場として活用している。 		

2 実践事例

事例 毎日、校内教育支援センターに、帽子とカバンを置きに来るようになった1年生のAさん
支援内容 1年生の1学期より学校を休みがちとなり、2学期より校内教育支援センターを利用するようになった。通室し始めたころは、情緒が不安定であった。暴言や大声を出すことが多く見られ、大人に対しても蹴るなどの攻撃行動をとることがあった。自分の思い通りにいかないことがあると、瞬時に攻撃的になる特性を持ち合わせているため、本人と保護者の意向を踏まえながら、一つ一つの課題に向き合い助言したり、上級生の姿のよさに気付かせたりして、乗り越えられるように支援した。
児童の姿の変容 同じ部屋にいる上級生が穏やかに仲良くゲームや学習などの活動をしているのを見て、一緒に遊んだり学習したりするようになった。ゲームなどの中で、ルールを守ることが大事だと感じ、センターの仲間のように静かに活動ができるようになった。そして、1日、数時間ずつ在籍教室での学習ができるようになっていった。今は、朝と帰りにセンターに姿を見せに来るだけになった。
児童(保護者)の声 「在籍学級の勉強は、みんな一緒だから楽しい。2年生は、初めての仲間だからセンターにもまた来た。」と、本人は言っている。在籍学級の仲間との学習に楽しみが増えてきているが、まだ少しの不安があり、センターがよりどころになっているようだ。

3 成果と課題

成果 <ul style="list-style-type: none"> ・個々の状況を踏まえ、保護者の意向に沿った支援ができた。 ・児童が興味をもてそうなカードゲームやブロックなどを準備し、楽しみながら交流や相談を進めることができた。
課題 <ul style="list-style-type: none"> ・センターの生活に楽しみを見だし、登校できるようになったのはよいが、児童によっては学習支援を拒むことや、在籍学級へ行けないことがある。

4 今後の方針

<ul style="list-style-type: none"> ・困っている児童に気付き、教師からアプローチすることを続ける。 ・本人の状況に合わせた個別課題を提示するなど、適切な学習支援をする。

事例③【児童生徒の実態に寄り添った支援】

1 設置状況

学校種	中学校	
開室時間	8:00～16:00	
校内教育支援センターの職員について	専属職員数 1人	
設置する際に工夫した点 <ul style="list-style-type: none"> ・丸みのあるテーブルやソファ、畳などを設置し、観葉植物や水槽を置くなどして、心が安らぎ、リラックスできる環境にした。 ・仲間や担当職員とカードゲーム等のレクリエーションで楽しんだり、少人数でワークショップをしたりできる広いテーブルも設置した。 ・人との関わりに困り感のある生徒も安心して過ごせるよう、パーテーションを用いて空間を仕切ったり、個別に学習できるスペースも設置したりして、個々の状態に対応できるよう工夫した。 		

2 実践事例

事例 不登校から通室し、徐々に学級の授業に参加し始めた A さん
支援内容 1年生の4月中旬から休みがちとなり、不登校となった。担任と市費指導員の勧めにより、6月頃から週に1日、給食の時間と昼休みに通室するようにした。通室時には本人の意向に合わせてカードゲームで遊んだり、仲間と卓球をしたりして、楽しく過ごせるように市費指導員と一緒に活動した。
児童の姿の変容 夏休み前は、週に1日程度の通室であったが、通室している仲間や市費指導員と交流を深めていく中で、表情がやわらぎ、笑顔も増えて、安心して過ごせるようになった。徐々に滞在時間や通室する日数が増えていき、12月頃から在籍学級の特定の授業にも参加することができるようになった。12月、1月は欠席が0日になった。
生徒の声 はじめはトランプをしたり、先生（市費指導員）と話したりするだけの登校でスタートして、それが楽しくて学校に行けるようになった。今も、パズルをしたり、折り紙をしたりして自分の好きなことをたくさんしている。学級の授業にも少しずつ参加できるようになってきてうれしい。

3 成果と課題

成果 <ul style="list-style-type: none"> ・1日の過ごし方を自己選択させ、できたことを担任や指導員が認めることで自己肯定感が高まった。 ・人と関わるのが苦手な生徒が、仲間との交流を通して笑顔になったりエネルギーをためたりできる場になっている。 ・市費相談員と悩みを抱えている生徒との相談体制の充実を図ってきたことにより、不登校の未然防止につながっている。
課題 <ul style="list-style-type: none"> ・登校することに抵抗がある生徒にとっては、校内教育支援センターに入ることに困難さがある。 ・特別支援学級在籍の生徒の通室について、どう支援すべきか模索が続いている。 ・より多様な困り感や悩みを抱える子のために何をすべきか、環境整備を含めて進めている。

4 今後の方針

<ul style="list-style-type: none"> ・悩みや、困り感を抱えている生徒の存在に教師がいち早く気が付き、早い段階でアプローチをしていく。 ・通室している生徒の変容を長期スパンで捉え、結果を急ぐことなく心情や状態に寄り添いながら支援していく。 ・学習や進路に不安を持つ生徒の学習支援のあり方について、AIドリルなどを活用するなど工夫する。
--

事例④【教職員の連携の工夫】

1 設置状況

学校種	中学校	
開室時間	8:30~16:00	
校内教育支援センターの職員について	専属職員数 2人	
設置する際に工夫した点 <ul style="list-style-type: none">・校内教育支援センターの奥には人目を気にすることがなく個別に学習等に取り組むことができるように、または二人一組で学習などできるようにパーテーションで仕切った机を設置した。・誰がいつ在籍学級に行くのか、またはセンターを利用するのか、個々の学習計画が一目で分かるように、ホワイトボードを設置し計画表を貼った。・学習や生活の状況が分かるように担当の指導員や教員がそれぞれの生徒がどのような様子だったのかを書き込む日誌を活用した。・センターを利用する生徒に対し、教員が共通の対応ができるようモニターを設置し、担任からどのような指導をしてほしいのか、支援した教員がどのように対応したか書き込みし、いつでも見られるようにした。		

2 実践事例

事例	在籍学級での学習が不安になり、校内教育支援センターを利用し始めた A さん
支援内容	2年生のゴールデンウィーク明けから休みや遅刻が増え、10月から登校しぶりが始まった。12月から担任の勧めと保護者・本人の希望から1日数時間の通室を始めた。学年の先生や市費教育支援員による学習の指導を本人の意向に合わせて実施した。
児童の姿の変容	通室前は、遅刻をしたり、欠席したりすることが多かった。しかし、通室していく中で、通室している同学年の仲間と交流を深め、市費学教育支援員の学習指導を受けたり、懇談したりする中で、徐々にエネルギーを回復してきた。その結果、欠席も減り、朝から登校する日が増えてきている。
保護者の声	登校しぶりがはじまり、先生からもセンターの利用について話があったので、利用させていただこうと考えました。はじめは少々緊張していたようですが、センターの先生とも緊張せずに話ができるようになり、自分の困っていることなどを話しているようで、登校することに前向きになってきているように思います。

3 成果と課題

成果	<ul style="list-style-type: none">・個々の状況を踏まえ、本人や保護者の意向に沿った支援ができた。・日誌やモニターの活用をすることで、通室している生徒の様子を教職員で共有することができ、指導に生かされた。・ある程度の通室や相談をすることができた児童は、自分の教室で学ぶ機会が増えてきた。
課題	<ul style="list-style-type: none">・相談したくても相談できない生徒や継続した支援ができていない生徒がいる。・教師間や教育支援員との連携が十分でないために、通室している生徒の状況を知らないまま指導してしまうことがあった。共通理解をした上で指導を進めていく。

4 今後の方針

<ul style="list-style-type: none">・「ここからのアンケート」などから困っている生徒を発見し、教師からアプローチする。・学習できていない状況や生徒の心情を理解し、過度な介入にならないように不登校生徒への支援方法を研修し、職員の意識改革を図る。・センターを改装するので、活用しやすい名称や生徒にあった机の配置を考え、実践していく。
--

事例⑤【学校と家庭との効果的な連携】

1 設置状況

学校種	中学校	
開室時間	8:30~16:30	
校内教育支援センターの職員について	専属職員数 1人	
設置する際に工夫した点 <ul style="list-style-type: none"> ・生徒が自ら選択し希望に添えるよう空間を区切っている。 ・教室復帰を目指す学習支援スペースでは、ロッカーの設置、個人の教科書や教材を置き、個々のペースで学習支援を受けることができる。 ・コミュニケーションを支援するワークスペースでは、大きなテーブルと椅子を用意し、友達や職員とボードゲーム、カードゲーム、コグトレ、趣味（絵、手芸、パズル）等の交流を図ることができる。 ・心の安定を図る和室スペースでは、完全な個室を作ることができ、ホットカーペット、こたつ、座布団、毛布、タオルケット等備え、ゆったりと安心して休憩をとることができる。ユニバーサルデザインを取り入れ備品や掲示は背面に配置し工夫した。 ・Wi-Fi環境、冷暖房も完備している。 		

2 実践事例

事例 校内教育支援センターを利用して教室復帰をした1年生Aさん
支援内容 10月の合唱祭の取り組みと同時に欠席が続き、11月から相談員の家庭訪問を開始した。家庭でのキーパーソンである祖母の協力を得て登校を再開することができた。それまでにおよそ2か月を要したが、1月から安定してセンターへ登校ができたことで、本人の困り感を聞きだすことができた。2月には本人の困り感をきっかけに、本人と保護者同意のもとでWISCIVを実施し、本人の意向に合わせてセンターから教室へ通うことができた。三年生を送る会をきっかけに教室で学習しながら、国語、英語についてはセンターで本人のペースに合わせた学習支援を行っている。
生徒の姿の変容 はじめは人見知り強く意思表示が苦手なことで、会話の返事はうなづくことや笑顔で返していた。週1回の登校が安定して、徐々にエネルギーがたまり、表情よく笑顔が増え、相談員に困り感を話すことができるようになった。センターから教室の授業に通うことができるようになり、仲間との関係に楽しさを感じ、学校生活が安定した。部活動での困り感を顧問の援助で解決し、週4日の登校ができるようになると、教室で学習しながら苦手な教科のみセンターで個別の支援を行っている。
保護者の声 登校を再開させることが難しかったが、度重なる学校からの手紙や訪問で週1回、校内教育支援センターに通うことができるようになった。行事のたびにお友達が声をかけてくれたり、担任の先生と遊びに来てくれたりきっかけを作って下さりありがたかった。毎日登校するようになり、笑顔が増え家族の会話も増えた。自分の苦手なことや困っていることを話し、部活の問題も解決でき安心して登校できるようになった。WISCIVのテストを進めてもらい勉強が苦手なことも原因が理解できてよかった。不安はあるがまずは学校に毎日行けるようになってうれしいです。

3 成果と課題

成果 <ul style="list-style-type: none"> ・本人、保護者の意向に沿った支援ができた。 ・定期的に保護者との懇談を行うことで、職員、生徒、保護者が同じ目標に向かい、早い段階で教室に戻ることができた。 ・市独自の文書回覧共有システムを使いタイムリーに情報を共有することで、全職員で共通した対応をとることができ、生徒や保護者の信頼を得ることができた。

- ・生徒指導委員会に相談員が参加することで、学校の方針に沿った対応ができ、個の問題点についても早期決定、早期対応につながった。
- ・早期に対応できた生徒は、早い段階で教室復帰できた。
- ・発達に困りを抱えた生徒の発見ができたことで、学びへの不安の軽減に努めることができた。

課題

- ・家庭でのキーパーソンがつかめず、欠席が長期化している生徒がいる。
- ・家庭の協力が得られず、訪問しても会うことができない生徒がいる。
- ・生活リズムの崩れから、勤務時間内に訪問しても会うことができない生徒がいる。

4 今後の方針

- ・不登校生徒への対応を共通理解するため、スクールカウンセラーによる職員の夏期教育相談研修を継続する。
- ・本人の状況に合わせて適切な学習支援を行う。
- ・保護者の信頼と共通理解のために定期的な懇談を継続する。
- ・文書回覧共有システムを使い随時情報共有を行う。
- ・生徒の登下校については管理職に随時状況を報告する。

事例⑥【オンラインを活用した学習支援】

1 設置状況

学校種	小学校	
開室時間	8:00~16:00	
校内教育支援センターの職員について 専属職員数	1人	
設置する際に工夫した点 <ul style="list-style-type: none"> ・中に利用児童がいるかどうかを示すカードを入口のドアに設置した。 ・利用児童2名がそれぞれで学習に集中できるように、中央にパーテーションを設置した。 ・利用児童2名が共同で活動できるように、大きな机を設置した。 ・新たに校内インターフォンを設置し、職員が在室したまま連絡がとれるようにした。 		

2 実践事例

事例 安心して過ごせる場所としての校内教育支援センター
支援内容 1学期はほとんど欠席しないで登校していたAさんだったが、夏休み明けから欠席が続くようになった。また、Bさんも1学期から欠席や遅刻が多い状態だった。2人にとって安心できる場所として校内教育支援センターへの通室を始めた。個別相談や簡単なゲームから始め、まずは「学校へ登校する」ことへのハードルを下げていく取組を行った。また、教室復帰を急かす働きかけは行わず、センターで過ごしていいという安心感を得られるようにした。
児童の姿の変容 Aさんは当初、車で送る保護者から離れる際に不安のあまり泣くことが多かったが、徐々にそうしたことが減ってきた。Bさんはタブレット端末でオンライン学習に落ち着いて取り組むようになってきた。市費相談員との信頼関係ができており、学習面でのサポートや不安解消のための教育相談などを通じて、安心できる場になってきた。
児童の声 学校の中で、教室に行けなくても過ごせる場所があるのは嬉しいし、オンライン学習で教室の様子が分かるのも嬉しい。教室と同じ勉強をすること、センターで別の活動をするなどについて、自分で決めることができるので、あまりストレスを感じるようになってきた。毎日学校に来れるようになってきたから、センターでの勉強や活動をがんばりたい。

3 成果と課題

成果 <ul style="list-style-type: none"> ・本人や保護者の希望に添う形の支援を行うことで、児童が登校できる日が増えてきた。 ・市費ほほえみ相談員の個に応じた指導・援助が奏功し、前向きに学習等に取り組むことが増えた。 ・給食を教室に取りに行ったり、学級の仲間と分担された掃除場所で掃除をしたりするなど、校内教育支援センターの外に出て活動することが増え、学級の仲間と関わることにに対する抵抗が減ってきた。
課題 <ul style="list-style-type: none"> ・限られた人間関係の中で過ごす中で、わがままや自己中心的な発言が見られることがある。 ・センターでの環境が十分に配慮されているため、居心地が良く、意識が教室復帰になかなか向かない。 ・個別学習が多いため、他者との関わりの中で身に付くはずの人間関係調整力が育まれない。

4 今後の方針

<ul style="list-style-type: none"> ・定期的に保護者と懇談を行うことで、学校と保護者との意思疎通を欠かさないようにする。 ・当該児童の自己決定を大切にす一方、決まりやルールを意識させる。 ・教室とのオンライン学習を継続することで、学級の一員としての意識をもたせる。 ・状況に応じた個別支援を行う。

事例⑦【オンラインを活用した学習支援】

1 設置状況

学校種	小学校	
開室時間	8:30~14:15	
校内教育支援センターの職員について 専属職員数	1人	
設置する際に工夫した点 <ul style="list-style-type: none">・周りの目が気にならないように、入り口と窓にそれぞれ衝立やカーテンで仕切りを設置して、落ち着いて過ごせるようにした。・オセロなどのボードゲームやカードを用意し、担当職員や友だちと交流しながらリラックスして過ごせる場にした。・児童用の机のほか、少人数でワークショップができる広いテーブルを設けるなどの工夫をした。		

2 実践事例

事例 海外現地校から編入した6年生のAさん
支援内容 5年生半ばから休みがちになり、不登校となった。教育相談主任からの勧めで相談室登校を始めた。通室時は得意な絵を描いたり、相談員と話したりして穏やかに過ごせるようにした。また、教室に入れなくても廊下で授業を受けたり、オンラインで授業配信を見たりできるように支援した。絵を描くことが得意なので、イラストを描いたり学級の掲示物を作ったりして、自己有用感を高められるようにした。
児童の姿の変容 1年生時に海外の現地校へ転出し、4年生時に現地校から編入した。5年生半ばから休みがちになり、不登校となった。相談員とじっくり話すことで自分のことを話すようになり、6年生では、ほぼ毎日校内教育支援センターに登校できるようになった。6年生後半になって、所属学級の廊下で授業を受けたり、オンライン配信を見たりすることが増えた。3学期からは、さらに教室で授業を受けることや終日教室で過ごせる日もあった。
児童の声 自分の好きなこと(絵、オセロ等)をする時間があったり、自分のペースで勉強したりすることができてよかった。また、先生(相談員)と話すと楽しい。

3 成果と課題

成果 <ul style="list-style-type: none">・児童の状態に応じて、廊下から授業を受けることと、オンラインで授業に参加することを選択することで、本人や保護者の目標や意向に沿った支援ができた。・じっくり話を聞いたり、相談したりした児童は、自分の教室で学ぶ機会が増えた。
課題 <ul style="list-style-type: none">・相談員の勤務が週4日のため、勤務しない日については十分な支援ができないこともあった。

4 今後の方針

<ul style="list-style-type: none">・今後もじっくり児童に向き合い、時間をかけて待ったり話を聞いたりして、児童自身の「~したい」を引き出していく。・学び方については様々な選択肢(オンライン授業や個別学習等)を用意し、適切な学習支援をする。
--

事例⑧【学習評価の工夫】

1 設置状況

学校種	中学校	
開室時間	8:00～16:30	
校内教育支援センターの職員について 専属職員数	1人	
設置する際に工夫した点 <ul style="list-style-type: none">・個人の学習机には、電気スタンドとホワイトボードを備え付けている。・個人学習だけでなく、校内教育支援センター内にいる生徒全員との関わりをもたせるために、教室の中央には大きい机を設置した。・パーテーションが5台あるため自由に仕切りができるようになっており、生徒の実態に合わせた環境が作れるよう、レイアウトを変えている。		

2 実践事例

事例 校内教育支援センターを利用している生徒の学習評価のあり方の具体化
支援内容 教室での授業と同じように評価できる場合(次の①～③)を明確にし、指導・援助を行っている。 ①教室で行っている授業を teams で配信し、校内教育支援センター担当職員が支援する場合 ②教室で行っている授業内容を校内教育支援センター担当職員と学習する場合 ③教科担任や職員が授業内容に合わせた補充授業を校内教育支援センターで行う場合
生徒の姿の変容 人間関係のトラブルで教室内での居場所がないと感じる、学習に不安をもつ等、様々な不安や悩みを抱える生徒たちは、校内教育支援センターが居場所となっている。周りの目を気にすることなくのびのびと学習ができ、生徒たちの表情は以前と比べてとても明るくなった。また、校内教育支援センター内での生徒同士のつながりもできており、生徒たちは、毎日元気に過ごしている。
生徒の声 <ul style="list-style-type: none">・校内教育支援センターで授業を受けても、教室と同じように評価されるためありがたい。・他の目を気にすることなく生活できるため、過ごしやすく、安心できる場所である。・毎時間に先生がついてくれるから、いろんな先生と話せるし、学習で不安なところを聞きやすい。

3 成果と課題

成果 <ul style="list-style-type: none">・個々が抱える不安感に寄り添い、生徒の自己選択・自己決定に沿った支援ができた。・カードに記録を残すことによって、教科担任があとから見直すことができた。・生徒理解研修を通して、全職員が個々の実態を知り、それぞれの生徒に合った言葉かけができた。・生徒の頑張りを認める場が多くあったことによって、生徒の自己肯定感が高まった。
課題 <ul style="list-style-type: none">・校内教育支援センター内の通信機器の整備や環境の改善(音声の聞き取りにくさ等)をする。・教室の仲間たちとの関わりはどうしても減ってしまうので、教室に入ろうと思っても、生徒は入りにくく感じてしまっている。

4 今後の方針

<ul style="list-style-type: none">・校内教育支援センターに通う生徒たちの理解を、他の生徒たちにも広げていく必要がある。・本人の状況に合わせた適切な支援ができるよう、毎週行っている生徒理解研修で、情報を共有し合う。必要ときには、速やかにケース会を開き、支援方法について検討していく。・校内教育支援センターに通う生徒の保護者には、定期的に面談をし、保護者の不安を取り除く。

児童生徒の状態に応じた不登校支援

登校している

① 学校に馴染んでいる

② 学校は辛くないが不安を感じている(元気がない)

③ 心の中では登校が辛い(欠席はしていない)

④ 教室で過ごせるが、遅刻や欠席がしばしばある

⑤ 登校しても教室には入れず、校内教育支援センター等で過ごす

<未然防止>

- (1) 不登校に関する基本的な考え方
- (2) 魅力ある学校づくり・学級づくり
- (3) 学習状況等に応じた指導と配慮
- (4) SOSを出すこと(受け止めること)
・SOSの出し方に関する教育のガイドブック
- (5) 教職員の相談力向上のための取組 (上記資料参照)
・教育相談これだけは！

<早期発見・対応>

- (6) 早期発見と初期対応
・教職員の連携の工夫 (実践事例集P6参照)
- (7) アセスメント(情報収集・分析)
- (8) 支援のプランニング
・児童生徒の実態に寄り添った支援 (実践事例集P4参照)
・「チーム学校」による組織的な対応
・支援計画作成のポイント
- (9) 休み始めの段階における初期対応
・不登校になる前段階の対応(家庭訪問)
・児童生徒が安心して利用できる環境の整備 (実践事例集P2参照)
- (10) 校内教育支援センター等の有効活用
・小・中・義務教育学校における校内教育支援センターの運営
～誰一人取り残されない学びの保障のために～
・オンラインを活用した学習支援 (実践事例集P9参照)
・児童生徒の学習評価の工夫 (実践事例集P11参照)
- (11) 学校と家庭との連携
・学校と家庭との効果的な連携 (実践事例集P7参照)

登校していない

⑥ 登校はできないが学校以外の施設への定期的な参加はできる

⑦ 比較的気軽に外出はできる

⑧ 家庭内では安定しているが、外出は難しい

⑨ 部屋に閉じこもり、家族ともほとんど顔を合わせない

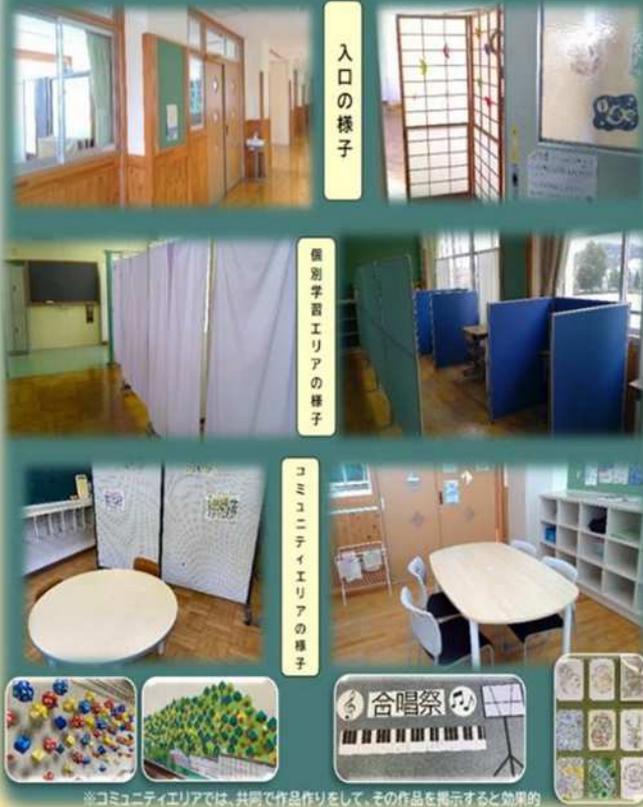
<長期化への対応>

- (12) 長期化への対応(自立に向けた支援)
- (13) 校外教育支援センター等の有効活用
・岐阜県学校・フリースクール等連携ガイドライン【R6年最新版】
- (14) 多様な関係機関との連携
・スクールソーシャルワーカー等の活用
・SC、SSW等の活用ハンドブック
・学びの多様化学校(分教室型を含む)の活用
・子どもの自己選択による居場所と支援の方向
・フリースクールの活用
・岐阜県学校・フリースクール等連携ガイドライン【R6年最新版】
・岐阜県ひきこもり支援の在り方に関する指針
- (15) ICT等の有効活用
・オンラインを活用した学習支援 (実践事例集P9参照)
・小・中・義務教育学校における校内教育支援センターの運営
～誰一人取り残されない学びの保障のために～
・岐阜県学校・フリースクール等連携ガイドライン【R6年最新版】
- (16) 保護者に対する支援
・電話相談窓口
・保護者の会(親の会)の開催
・未来をはぐくむ不登校児童生徒サポートセミナー(岐阜県教育委員会主催)
- (17) 多様な自立の在り方に向けての進路支援
・高校生段階に対する支援 (G-プレイス)



子どもの自己選択による居場所と支援の方向性

校内教育支援センター



学びの多様化学校(含む分教室)

西濃学園 自己への挑戦 ～奥山(北アルプス)登山～



岐阜市草潤中学校
令和3年4月開校
岐阜市立の「学びの多様化学校」

ありのままの自分で学ぶ



高山市「にじ色」



北方町「オンリー1」



(学校外)教育支援センター

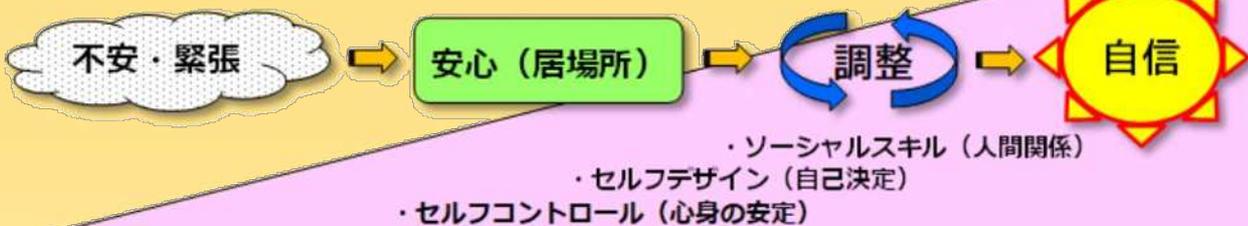
フリースクール

メタバース



自己選択 (自己決定)

社会的自立



子どもが来たいと思える「魅力ある学校づくり」に向けた支援のために・・・

- ①「不安・緊張の解消」→「安心感(居場所)」→「調整」→「自信」→「学び」→「自己実現」
- ②自己選択(自己決定)の場を位置づけた子ども主体の授業づくり
- ③お互いの多様な学びを理解し合い、尊重し合える仲間づくり
- ④「待つ」、「共に考える」を軸にした教師による支援